各位

金蘭千里中学校

本校入学者選抜試験問題に関してのお願い

昨今、教育現場における著作権の在り方が議論されています。本校も、著作権法に基づいた著作物の適切な運用と管理に取り組んでいます。

本校の入試問題の利用につきましても、下記の点にご留意いただき、適切なご利用をお願いいたします。

記

1．本入試問題の著作権は、本校に帰属します。複製の作成は、事前に申告いただいた場合のみ許諾します。

2．本入試問題で引用している文学作品等の第三者の著作物は、関係団体を通じて、引用の許諾申請を行っています。

以上

令和８年度中学入試

［前期Ａ・Ｅ入試］

国語科 問題

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この問題冊子は、表紙を含めて20ページあります。

   試験中に、印刷が見づらかったり、ページの乱れや抜け落ちに気づいたりした場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
3. 解答用紙は別に配布されます。解答はすべてその解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は下書きなどに利用してよろしいが、どのページも切り離してはいけません。

［前期Ａ・Ｅ入試］　受験番号＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

金蘭千里中学校

①次の文章を読み、後の問いに答えなさい。問題に字数制限があるものは、すべて句読点や記号も一字とする。

「夏休みのホタルのボランティア、参加してくれる人はいないかなぁ」

夏のはじめの、少しずつ気温があがりはじめた朝のホームルーム。担任の森先生が放ったその言葉に、岩ノ松中学校三年一組の教室はシンと静まりかえった。

まるで時間が止まってしまったような静けさの中、窓の外のセミの声がやけに大きく聞こえてくる。

「ホタルのボランティア」というのは、夏休み中に行われる、川をきれいにするボランティア活動のことだ。わたしたちが住んでいるこの岩ノ松町では、少し前までたくさんのホタルが見られたらしい。「ホタルがすめる環境を取りもどす」ことを目的に、川沿いのゴミ拾いをする参加者を学校ごとに募集している。参加希望の生徒は毎年少ないらしく、森先生はどこかつらそうな顔をしていた。

ホタルかぁ。わたし、生まれてから一回も見たことないや。

ここは東北の田舎町だけど、それでもホタルはめずらしい存在だ。

ホタルがお尻を光らせながら飛んでいる虫だということは知っているけれど、①どこか（　＊　）なもののように感じる。だって、aデンチが入っているわけでもないのに虫が自分で光るなんてすごい。小学生のころ、図鑑で見たホタルの写真は幻想的で本当にきれいだった。それを思い出すと、一度はこの目で本物のホタルを見てみたいとも思う。

だけど、二十七人がいるこの教室で「やりたい」と手を挙げる勇気は出ない。

ドクン、ドクン、心臓の音が大きくなっていく。考えるだけで顔も熱くなってきた。

目をつぶって、すっと手を挙げる自分を想像してみる。クラスみんなの視線が集まって、一部の女子は驚いた顔をして、それから……。

「はい。わたし、やりたいです」

一瞬、考えていることが自分の口から漏れてしまったのかと思ったけど、違った。

ハキハキとしたその声に振り向くと、一番後ろの席でメガネをかけた女子がピンと手を挙げている。

そっか、彼女……吉岡さんなら、こういうのやりたがるのも納得だ。

「ああ、吉岡か。他には？　やりたいって人はいないか？」

再び静かになる教室。みんな先生と目が合わないように斜め下を向いている。

このボランティアは、一つの学校から五人一組で参加者を出さないといけない。

つまり、吉岡さんの他にあと四人、集まらなきゃいけないってことだ。

「うーん。締め切りまでまだ少し時間があるから、みんな前向きに考えてみてくれ。他のクラスからも参加希望者が出てるかもしれないしな」

先生の言葉でこの話はいったん終わりということになってしまった。
残念な気持ちとホッとした気持ちが渦巻く。
まぁ、少し興味を持っただけだし、ものすごくやりたかったわけじゃないし、どうせこの場で手なんて挙げられなかっただろうし。
心の中で②いろいろな言い訳を並べながら、再び吉岡さんのほうをチラッと見る。
吉岡蛍子さんは、肩までの髪を二つ結びにして、銀色のフレームのメガネをかけた、いかにも『まじめ』って感じの女子。雰囲気だけじゃなくて本当に頭がよくて、定期テストではいつも一位らしいってうわさだ。
去年の秋に東京からこの田舎に転校してきた彼女は、三クラスしかない学年のみんなからの注目の的だった。でも、その『特に都会っぽくない』見た目と、休み時間は誰ともしゃべらずに一人で本を読んでいる一匹狼ぶりから、注目はすぐにおさまった。
しかも、その読んでいる本というのが昆虫の図鑑や昆虫記……虫にまつわる本ばかり。おまけにカバンにつけたストラップは大きなトンボ。
吉岡さんは転校してきてたった数日で、みんなの中の『話しかけちゃダメな人』のカテゴリに入ってしまったというわけだ。
……中学三年生になっても、虫が好き。
我が道を行くっていうか、そうとう変わってる。
周りの目とか、なにを言われているのかとか、気にならないのかな。
そう不思議に思いながら見ていると、パッと目が合ってしまってあわてて前を向く。
彼女のb分アツいメガネのレンズに教室の蛍光灯の光が反射していて、どんな表情をしているのかまではわからなかった。

「ホタルの川をきれいにするとかさぁ、くさそうだし、誰も行くわけないじゃんね。中三にもなって」
お昼休みにいつものメンバーでお弁当を食べていると、友達の遠藤咲が笑いながらそう言った。声のボリュームを落とす様子はなさそう。
こっそり吉岡さんの席を見ると、彼女は一人でもくもくとお弁当を食べていた。
「わかるー。なんのために？　って感じだよね」
「うち、虫ってだけで無理」
奈津美とあかりも咲の言葉に続いた。わたし・鈴木真優がいるのは四人組のグループだ。三年生のクラス替えで仲のよかった友だちと離れてしまったわたしを、咲たちはグループに入れてくれた。小学校が一緒の咲は昔から目立っていた。目が大きくてかわいくて、ハキハキしたリーダーシップのある性格をしていて、小学生の時はあこがれの存在だったんだ。
「真優は？」

咲が箸の先を噛みながらにっこりと笑う。
そのクセ、やめたほうがいいよ、小さな子どもみたい。一緒にお弁当を食べるようになってからずっと思っているけれど、そんなこと言えない。言ったらきっと怒って不機嫌になるからだ。わたしは横目でまた吉岡さんのほうを見た。お弁当を食べ終えたらしく、席を立って教室を出ていくところだった。
『でも、ホタルってきれいだし、ちょっと見てみたくない？』
心の中のわたしがそう言う。
だけどその言葉はまるで水の中から発したみたいにくぐもっていて、水面に出ることなく泡になって消えてしまった。
正解の返事はこれじゃない。あわてて咲が満足する返事を探す。考えている間はまるで、わたし自身が水の中でおぼれているような感覚だ。上下左右、どっちを向いても真っ暗で光がないから泳げない。
「うーん。そんなヒマあったら受験勉強するよね」
そう言うのが精一杯だったけど、咲はまた笑ってうなずいた。
「てか、やばくない？　吉岡、どんだけ虫が好きなんだって。小学生みたい」
そこから吉岡さんの話題になって、咲はひたすら悪口を言いつのる。
咲はもともと吉岡さんのことが気に食わないようで、ずっと［A］の敵にしている。吉岡さんが転校してきて間もないころ、同じクラスだった咲はひどいことを言われたんだって。でも、なにを言われたのかは教えてくれないから、咲が言っていることが本当かどうかもわからないしｃキョウカンのしようもない。吉岡さんがこの場にいないことが救いだ。いても同じように咲は悪口を言うかもしれないけど。
「ガリ勉」とか「ｄジミ」とか「虫オタク」とか、文句を並べる咲にうんざりしても、そんなことないよとは言えない。奈津美とあかりもうんうんとうなずいている。二人が本当に咲と同じ気持ちなのかはわからないけど、女子ってきっとそういうものだ。
「うわぁ、女子ってこえー」
すると、いきなり横から低い声が飛んでくる。
びっくりした。わたしの心の中を読まれたのかと思った。
声がしたほうを向くとわたしたちのすぐそばに立っていたのは同じクラスの男子・小野航平くんで、彼は苦笑いしながらこっちを見下ろしていた。
「なに小野。どういう意味ー？」
「いや、ほんと女子って悪口ばっかりな」
「悪口じゃないってー。ちょっと文句言ってただけ」

「なにが違うんだよ」
あきれたように言う小野くんの腕を咲は笑いながら叩く。「小野、盗み聞きなんてひどい」って言いながら、その顔はとてもうれしそうだ。
そう、咲は前から小野くんのことが気になると言っていた。小野くんは背が高くて、眉毛がキリッとしていて、誰とでも話せる明るい性格をしている。だからクラス一の人気者だし、彼のことを好きな女子は他のクラスにもたくさんいるらしい。
小野くんは「女子って怖い」と言いながら、咲と楽しそうに話しはじめる。どうせ、ちょっとからかうために［B］を挟んだだけで、本気でそんなことは思っていないんだ。女子って、たぶん小野くんが思っているより怖いよ。と、心の隅で小さく言う。
「お前ら、ホタルのボランティアやらねーの？」
「えっ、もしかして小野、やるの？」
小野くんの問いかけに咲の顔つきが変わったのがわかった。
咲、小野くんがやるならやるって言い出すかもしれない。そうしたらわたしも奈津美もあかりも強制参加だ。でも少しだけ、そうなったらいいなと思う。
「やらねーよ。ホタルとか川掃除とか、田舎くさい」
その返事に、咲はわかりやすく笑顔になる。
「なーんだ、だよねぇ。わかる。自然保護とかいかにも田舎って感じ。山の写真なんてインスタに載せてもかわいくないし」
アハハと笑って咲はまた小野くんの腕を軽く叩いた。
そんなこと言っても、ここは間違いなく田舎なんだけどな。冬は雪がすごいし、車がないと生活できないし、電車だって一時間に一本くらいずつしか通っていない。
でも、咲も小野くんも都会人って感じの外見をしてる。
二人とも、大人になったらきっとこの町を出て、東京とかで働くんだろうな。寂しいような、離れられてなんだかホッとするような……そこまで考えて首を横に振った。
「でも、吉岡もあそこまで好きなもん貫けんのすごくね？　まじで虫が好きなんだな」
小野くんがeカンシンしたように言った。
その気持ちわかる。吉岡さんって誰にも流されないって感じですごいよね。
そりゃあ、敵は作りやすいかもしれないけど、わたしみたいに言いたいことも言えないでモジモジ小さくなっているよりいいと思う。
「……そう？　ふーん、小野ってああいうのがいいって思うんだ。趣味悪ーい」
「趣味ってなんだよ、そういう意味で言ったわけじゃないっての」

あきれたような小野くんにあからさまに不機嫌になった咲が、口をとがらせながら話題を変える。
「てか小野、なんでこっち来たの？　あんたの席あっちじゃん」
咲はそう言って廊下側の後ろのほうを指さす。今わたしたちがご飯を食べているのは咲の席がある窓際の真ん中のほうだから、教室の中では反対の場所だ。
「ああ、長谷部に借りてた本返しに来たんだよ。長谷部、これありがとな。おもしろかった」
長谷部と呼ばれた男子は、窓際の一番前の席でびくっと肩を跳ねさせた。
そして、ロボットのように③ぎこちない動きでこちらを振り返る。
「う、うん。おもしろかったならよかったよ」
二重まぶたの大きな瞳と一瞬だけ目が合った。黒目が子犬のようにキラキラとうるんでいるように見える。
「えっ、小野とケンちゃん、仲いいの？　意外！」
驚く咲に、小野くんはうなずいた。
「まぁ、一年からクラス一緒だし。な？」
「うん、そ、そうだね」
小野くんが笑いかけると、彼もふわっと優しく笑う。
彼・長谷部健都くんは、目が大きくて、小柄で、女子からは「このクラスで一番かわいい」なんて言われている。男子グループに交じって騒がないひかえめな性格も、その外見にぴったりだ。
「あの、遠藤さん。そういうふうに呼ばないでよ……」
「ええ、なんで？　いいじゃんケンちゃん、かわいくて合ってるよ」
ケラケラと笑う咲に、長谷部くんは少し赤くなってうつむく。
すると、小野くんがそれまでより低い声で言った。
「遠藤。こいつ、まじで嫌がってるから。な？」
まじめな顔をした小野くんに、咲は「……ごめん」と素直に謝った。
やがて昼休みが終わるチャイムが鳴って、小野くんは長谷部くんの肩をポンと叩くと自分の席にもどっていった。
〝ちゃん呼び〟が恥ずかしかったのか、長谷部くんはなにも言わずに前を向いてしまう。
咲は、ぼーっとした様子で小野くんの後ろ姿を見つめていた。
優しくて明るい小野くんが人気あるのもわかる気がする。

お弁当のｆツツみを片付けていると、教室にもどってきた吉岡さんがわたしたちのほうを見てきた。もしかして、ホタルのボランティアをバカにしていたのが聞こえていたのだろうか。

わたしはそんなこと、思ってないよ。

なんて、自分を守るような言い訳をする。ただ心の中で言っただけだから吉岡さんには届かないけれど。

吉岡さんからしたら、わたしも咲も同じように見えているんだろうな。そう思ったら切なくなって、吉岡さんと目が合わないようにうつむきながら自分の席に座る。

すると。

「鈴木さん」

名前を呼ばれて顔をあげる。いつの間に近くに来ていたのか、わたしの席のすぐそばに吉岡さんが立っていた。

あまりに驚いたので「へ」と情けない声が漏れてしまう。「鈴木さん」というのは間違いなくわたしのことだ。ありふれた苗字だけどこのクラスに「鈴木」はわたししかいない。

吉岡さんって、ひかえめな雰囲気なのに人気者の小野くんのように声はよく通る。朝のホームルームでピンと手を挙げていたときもそう思った。

「な、なに？」

どうか話していることを咲に気づかれていませんように、とこっそり祈りながら返事をする。すると彼女は表情を変えないまま、

「ホタルのボランティア、やらない？」

と言った。

……心の中の池に水が一滴落ちて、そこからふわっと何重もの輪が広がっていく。

そんな感覚がした。

「なんで、わたし……？」

驚きながらも、絞り出した言葉がそれだった。

これまでまともに話したこともないのに、どうして？

疑問に思っていると返ってきた理由は意外なものだった。

「だって鈴木さん、朝のホームルームのとき、やりたそうな顔してこっちを見てたから」

「えっ!?」

確かにわたしは、あのとき吉岡さんのほうを見ていた。でもそれは、やりたがる人がいなかったから先生が気の毒だなと思って、吉岡さん

がどんな顔をしているのか気になって……。
「ホタル、きれいだよ」
「えっ、吉岡さん、見たことあるの？」
「ううん。予想。でもおばあちゃんが、小さいころはたくさんいたって話してくれた」
「そっか。いいなぁ」
そう言ってしまってから、ハッとする。
あわてて口に手を当てたけど、吉岡さんはそんなわたしを見て少しだけほほえんだ。
吉岡さんの笑った顔、はじめて見た。
その笑顔を見てなんだかうれしいと思うのは、どうしてだろう。
「ボランティアに参加したら、たぶん見られるよ」
「そう……だよね」
まるで心を読まれているみたい。吉岡さん、わたしがボランティアやホタルに興味があることに気づいていたのかな。
一度うつむいてからそっと顔をあげたら、メガネの奥の瞳と目が合った。そのときだった。
「真優ー、五時間目、教室移動だよ」
咲の高い声とともに、細くて白い腕が後ろから伸びてきた。突然触られたことに驚いてビクッとしてしまう。
「てか真優って吉岡としゃべるんだ。知らなかった」
「あ、えっと」
まずい。咲、怒ってる。本当に吉岡さんのことが気に食わないから、わたしが吉岡さんと話しているのもおもしろくないらしい。
④咲の機嫌をもとにもどしつつ、吉岡さんに失礼にならないような言葉を探す。だけどそんな都合のいいものがパッと出てくるほど、わたしの頭の回転は速くなかった。
「わたしが鈴木さんのこと、ホタルのボランティアに誘ってたの」
わたしが悩んでいるうちに吉岡さんが答えてしまう。肩に置かれた手にぐっと力が入ったのがわかった。
「ボランティア？　真優、そんなのやらないよねぇ」
「それは遠藤さんの意見であって、鈴木さんがどう思っているかはわからないじゃん」
「はぁ？　だって真優はそんなヒマあったら受験勉強するって言ってたし」
それはさっき、確かにわたしが言った言葉だ。⑤気まずくて吉岡さんから目をそらしてあいまいに笑うことしかできない。

「あたしも、ボランティアやるヒマあったら勉強したほうがいいと思うよ？　まぁ、頭のいい吉岡サンには関係ないか」
そう嫌味を言った咲に、吉岡さんは表情を変えないまま口を開いた。
「どうせみんな、夏休みなんてだらけて勉強なんかしないんだから、ボランティアにでも参加して少しでも内申点あげておいたほうがいいと思うけど」
……わたし、咲、吉岡さん。三人の間に風が通ったようにその場の空気が冷える。
咲の手は震えていて、今にも声を荒らげそう。
そんな爆発寸前の咲をよそに、吉岡さんはくるっと［C］を向けて自分の席へともどってしまった。
「なにあいつ、やばくない？　真優、おとなしいから頼めばやってくれると思われてるんじゃない？」
と言われて苦笑い。⑥咲にとって、わたしは「おとなしい」人間に見えてるんだ。いつも人目を気にして縮こまっているから無理もないのかな。
高校生や大学生、大人になったら……ここじゃない場所でなら、もっと自分らしくいられるのだろうか。でも、咲や吉岡さんのように堂々としているわたしの姿は、自分でも想像できないや。

（五十嵐美怜『15歳の昆虫図鑑』より　一部改めたところがある）

（一）波線部a～fのカタカナを漢字に直しなさい。
a　デンチ　　b　（分）アツ（い）　　c　キョウカン　　d　ジミ　　e　カンシン　　f　ツツ（み）

（二）傍線部①「どこか（　＊　）なもののように感じる」とあるが、（　＊　）に入る最も適切な言葉を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア　非常識　　イ　非人情　　ウ　非合法　　エ　非現実

（三）傍線部②「いろいろな言い訳」とあるが、どのようなことに対する「言い訳」なのか、三十字以内で説明しなさい。

（四）傍線部③「ぎこちない」の本文中での意味として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　よそよそしい
イ　遠慮のない
ウ　なめらかでない
エ　不格好である

（五）［A］・［B］・［C］に入る、体の一部を表す漢字一字の言葉をそれぞれ次のア～キの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　口　イ　背　ウ　鼻　エ　顔　オ　目　カ　歯　キ　首

（六）傍線部④「咲の機嫌をもとにもどしつつ、吉岡さんに失礼にならないような言葉を探す」とあるが、「わたし」はこのように考えているときの自分をどのようにたとえているか、本文中から連続する二文を探し、はじめの五字を抜き出して答えなさい。

（七）傍線部⑤「気まずくて吉岡さんから目をそらしてあいまいに笑うことしかできない」とあるが、このときの気持ちを説明したものとして最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　「ボランティアをやるヒマがあったら受験勉強をする」と言ったのは、咲に嫌われないようにと考えてのことで上手く言えたと思っていたが、定期テストでいつも一位だという吉岡さんはどう思って聞いているだろうと思うと急に恥ずかしくなり、その恥ずかしさを隠せず困惑している。

イ　「ボランティアをやるヒマがあったら受験勉強をする」と言って上手く咲に気に入られ安堵していたのだが、咲に嫌われている吉岡さんに自分の喜んでいる姿を見せるのはなんとなく気が引けるので、なんとかうれしさが顔に表れないよう気をつけてその場をやり過ごそうと考えている。

ウ　「ボランティアをやるヒマがあったら受験勉強をする」と言って咲に気を遣って心にもないことを言ってしまったが、自分の言ったことには責任を持たなければならないので否定することも訂正することもできず、吉岡さんには理解してもらうしかないと自分を納得させようとしている。

エ　「ボランティアをやるヒマがあったら受験勉強をする」と言ったのは本心ではないことだったが、咲の機嫌をそこねないようにと確かに言ったことであり、ホタルを見たいという自分の気持ちに気づいている吉岡さんを前に、自分の言葉を訂正できないでいることを情けなく思っている。

（八）傍線部⑥「咲にとって、わたしは「おとなしい」人間に見えてるんだ」とあるが、「わたし」は自分のことをどのような性格だと思っているのか、それを説明した次の文の（　X　）・（　Y　）にあてはまる言葉を、本文中の言葉を用いてそれぞれ三十字以上四十字以内で答えなさい。

【咲や吉岡さんや小野くんが（　X　）性格であるのに対して、自分は（　Y　）性格だと思っている。】

② 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。問題に字数制限があるものは、すべて句読点や記号も一字とする。

私と本のおつきあいはものすごく長い。小学校にあがる前に本との（注1）蜜月があった。その後も本を読み続けているけれど、本当の意味での蜜月というのは、あのころだけだったと思う。

保育園に通っていた私は、ほかの子どもよりずいぶんと未発達で、うまく話せず、うまく遊べず、aヒツゼン的に、友達がひとりもいなかった。友達のいない子どもにとって、休み時間はたいへんに苦痛だった。

休み時間や、母親のお迎えを待つあいだ、苦痛から逃れるために本ばかり読んでいた。だいたいが絵本。字だってろくに書けなかったから、文字より絵の多い本を開いていた。

そうして実際、本は苦痛をすっぱりと取り去ってくれた。本は、開きさえすれば、即座に読み手の手を取って別世界へと連れていってくれる。たったひとりの時間、保育園にいながらにして、別世界へと連れていってもらうのは、本当にありがたいことだった。友達がいないとか、みんなのできることがなぜかできないとか、その別世界では忘れ去ることができる、いや、その世界ではそんなことはそもそもまったく関係がないのである。

読むだけではもの足りず、（　A　）の絵本にはクレヨンで色をつけ、カラーの本には自分の分身を描きこんだり、動物を描きこんだりした。そうすることで、本のなかの世界はどんどん近づいてきて、しまいには、本に書かれた世界が、そっくりそのまま自分のものになってしまう。私のためだけに書かれた本、私のためだけに存在する世界。

小学校にあがって、少しは発達もしたのか、ほかの子どものできることが、私にもようやくできるようになった。友達もできた。休み時間は、本を読むより、友達と土埃だらけになってグラウンドを走りまわっているほうが、ずっと楽しくなった。

けれど私は本を手放すことができなかった。学校から帰ると、即座に本を開くような毎日だった。

本の一番のおもしろさというのは、その作品世界に入る、それに尽きると私は思っている。一回本の世界にひっぱりこまれる興奮を感じてしまった人間は、一生本を読み続けると思う。そうして私は、その最もbゲンシ的な喜びを、保育園ですでに獲得していた。

服を買いに出かけたデパートで、服はいらないから本を買ってほしいと母にせがんだことを覚えている。本さえ与えておけばおとなしいから、本であれば親はなんでも買ってくれた。本当に、本にかぎっては、これ以上ないほど贅沢な思いをして私は育った。外国の物語、日本の物語、昔の物語、幽霊や妖怪が出てくる物語、cジツザイした偉い人の物語、読むものがなければ、小鳥の飼いかた、蜘蛛の生態に至るまで、かたっぱしから手にとってページを開いた。

私の住む家のそばには、ちいさな本屋が一軒あるきりだった。乱暴な言い方をしてしまえば、①田舎によくある、本を売っていない本屋である。売っているのは漫画と週刊誌、女性誌に漫画雑誌、それから文房具、レジにはにおいつき消しゴムの箱があり、その隣には（注2）

リリアンがあるような。

バスに乗って都心にいけば、本を売る本屋がある。ものすごく巨大な本屋。服はいらない、本を買って、とせがむとき、母に連れられていくのはこの書店だった。それは横浜駅へと続く地下街、ジョイナスの有隣堂である。有隣堂は、幼い私を遊園地のように魅了していた。子ども服売場なんかより、ずっと興奮的な場所だった。

本がある、という理由で、学校で一番好きな場所も図書室だった。今でもよく覚えている、黄色い絨毯、読み尽くせないだろう数の本、ガラス窓とそこから入りこむ陽射し、図書係の先生の声や笑い顔なんかも。

②小学校二年生のとき、はじめてつまらないと思う本に出合った。そのとき私は入院していた。その本は、入院していた私におばが持ってきてくれたものだった。本ならばなんだってうれしかったから、もらってすぐに読んだのだが、なんだかさっぱりわからない。私にとって、つまらない、は、イコール理解できない、だった。

サン＝テグジュペリの『星の王子さま』である。大判の、カラーの本だった。

最後まで読み、つまらないと結論を出した私はその本を放って、ほかの本を読み続けた。ひとりで入院しているのは、さみしく、退屈なことだったが、それでもずっと本を読んでいられることだけはたのしかった。理解できずつまらない『星の王子さま』は、それきりどこかへやってしまった。退院するころには、そんな本のことなど、すっぱりと忘れていた。

とはいえ、一冊くらいつまらない本に出合ったからといって、本と離れるはずがない。その後も私は図書室に通い詰め、ジョイナスの有隣堂に興奮した。

中学、高校になっても本は読んだ。読むには読んだが、保育園や小学校の蜜月とは少しちがうつきあいかただった。

今思うと、そのころは、本の世界よりも、現実のほうがBせわしなかったんだと思う。私はとてもちいさな世界で生きていたけれど、それでも、年齢や自分自身や毎日や友人や、日々起きる（注3）些事と折り合いをつけていくのに必死だった。手っ取り早く言えば、本より新しい服がほしかったし、有隣堂よりわくわくする場所が、いたるところに出現した。

それでも一番好きな授業は国語だった。ほとんどの授業が理解できないなかで、教科書に載っている小説に目を落とせば、机の前にいながらにして、やっぱり別世界へトリップすることができる。今でもいくつかの小説と、文字を追いながら私の垣間見た別世界の感触を、生々しく覚えている。x『こころ』の暗い和室や砂利道、y『羅生門』の廃墟と闇、z『城の崎にて』の陽射しと虫の死骸。漢文の授業でさえ好きだった。すらすらとは読めない漢字の羅列を見つめていると、時間も空間も超えた異世界が、いきなり目の前にあらわれて私をぱくりと飲みこんでくれるから。

そうして高校二年生のとき、仲良しだった友達が、一冊の本をくれた。ちいさなサイズの、絵の入った本だった。

③私はそれを一気に読み、すごい、と思った。別世界へ連れ出してくれるばかりでなく、じつにいろいろ考えさせてくれる本だった。なん

てすごい本なんだろう、でもどこかで読んだ気がする。どこで読んだのか、なかなか思い出せなかったが、あるときふと思い出して、はっとした。

それは、小学校二年生の私が、病院のベッドでおもしろくないと投げ出した、『星の王子さま』だったのである。

カラー版の『星の王子さま』を持ってきてくれたおばは、私が中学校一年生のときに亡くなっていた。彼女が持ってきてくれたその本も、もはや手元にはない。けれど、その本に書かれていることを理解したとき、その物語を、物語の世界を、言葉のひとつひとつを、もう一度おばから受け取ったように思えた。九年という時間を飛び越えて、再度手渡された贈りものに、私には感じられたのである。

以来、私はおもしろいと思えない本を読んでも、「つまらない」と決めつけないようになった。これはやっぱり人とおんなじだ。百人いれば、百個の個性があり、百通りの顔がある。つまらない人なんかいない。残念ながら相性の合わない人はいるし、外見の好みもあるが、それは相手が解決すべき問題ではなくて、こちら側の抱えるべき問題だ。つまらない本は中身がつまらないのではなくて、相性が悪いか、こちらの（注4）狭小な好みに外れるか、どちらかなだけだ。そうして時間がたってみれば、合わないと思っていた相手と、ひょんなことからものすごく近しくなる場合もあるし、こちらの好みががらりと変わることもある。つまらない、と片づけてしまうのは、（書いた人間にではなく）書かれ、すでに存在している本に対して、失礼である。

さて、少々本と距離を置いたつきあいかたをした私は、大学生になって、たいへんなカルチャーショックを味わうdハメになる。私が進学したのは文学部の、文芸専修という学科だった。語学のクラスメイトも専修のクラスメイトも、私の五十倍本を読んでいるような人たちばかりだった。

彼らがふつうに語っている作家の名前がわからない。彼らの口にのぼるタイトルを聞いたこともない。本が好きだ、小説家になりたい、そう思ってその大学のその学科に進学したのに、私の読んできた本なんか、勘定にまったく入らないではないか。なんたること。

ショックを受けた私は、本の話をする人とは友達にならないように心がけた。だって傷つくだけだもの。馬鹿話か恋愛話を好んでしてくれる人とばかり、つるんで遊んでいた。そうして、耳に入ってきた見知らぬ作家、見知らぬタイトルの本を、こっそりと読み耽った。

ジョイナスの有隣堂が世界書店だった私だが、行動範囲が広がったことによって、世界はぐんと広がった。新宿の紀伊國屋なんて冗談みたいだった。池袋のパルコブックセンター（現リブロ）は、ここに住みたいとeセツボウしたほどだ。学校内にもかなり大きな本屋が二つあった。学校の最寄り駅にも、入ったが最後出たくなくなるような本屋があった。

無知でよかったことがあるとするなら、この時期、心から好きだと思える本と出合えたことだと思う。クラスメイトたちがCしたり顔で話す作家の小説を、私はおもしろいと思えなかった。だから、彼らの口にのぼらないような作家ばかりを、片っ端から読んでみた。私の通う大学は、古本街と隣接していたので、紀伊國屋やパルコブックセンター以外に、古本屋にも足繁く通った。店頭に出されたワゴンの、名も知ら

なかった作家の安価な本を買って読む。数人の作家の小説が載ったアンソロジー本はたいへんにお得に思えた。五人の作家の小説を読んで、好きだと思える作家にひとりでも出会えると、すごくラッキーだった。その作家の名前を覚えて、大型書店へいけば、著作が何冊も見つかる。

カルチャーショックを受けた大学を卒業して、その一年後、私は物書きになった。物書きになったらなったで、大学の比ではないカルチャーショックを受けた。同業者も編集者もみんな年上で、彼らの話す作家もタイトルも、ふたたび私にはちんぷんかんぷんだったのである。クラスメイトが五十倍だったら、彼らは五百倍、本を読んでいた。だれそれの作品は読んだ？　と訊かれれば、正直に、「それはだれでしょう」と訊き返すしかなく、すると編集者はぽかんとした顔で私を見るのだった。

また同じことのくりかえしである。見聞きした名前を覚え、こっそり入手して読む。知ってよかった、と飛び上がりたくなるような作家に出会えることもあれば、私の頭が幼稚すぎて理解できなかった作品もあった。

気がつけばそのカルチャーショックも、十五年も前のことになっている。

今では私は、話に追いつくために、純粋な知識のために本を読むようなことはしない。④十五年かけてわかったのだ。世のなかには私の五百倍、千倍の本を読んでいる人がいて、そういう人に追いつこうとしても無駄である、そんな追いかけっこをするくらいなら、知識なんかなくたっていい、私を呼ぶ本を一冊ずつ読んでいったほうがいい。

そう、本は人を呼ぶのだ。

本屋の通路を歩くと、私だけに呼びかけるささやかな声をいくつか聞くことができる。私はそれに忠実に本を抜き取る。そうして出会った作家が幾人もいる。恋人はひとりであることがのぞましいけれど、本の場合は、三人、四人、いや十人と、相性の合う「すごく好き」な相手を見つけても、なんの問題もない。そんな相手は増えれば増えるほど、こちらはより幸福になる。

本を置いている場所は、図書館であれ古本屋であれ大型書店であれ、子どものころの有隣堂とまったく等しく私をわくわくさせる。そうして私にとって、四歳で手にした絵本も、昨日開いた（注５）パトリシア・ハイスミスも、今再読している（注６）林芙美子も、まったくおんなじだ。文字を目で追うだけで、それは私の手首をつかまえて、見知らぬところへ連れていってくれる。そのすみずみを見せてくれる。

あんまりおもしろい本に出合ってしまうと、読みながら私はよく考える。もしこの本が世界に存在しなかったら、いったいどうしていただろう。世界はなんにも変わっちゃいないだろうが、けれど、この本がなかったら、その本に出合えなかったら、確実に、私の見る世界には一色足りないまんまだろう。だからこの本があってよかった。助かった。友達のいない、みんなのできることのできない、未発達のちいさな子どものように、そう思うのだ。

（角田光代「あとがきエッセイ　交際履歴」より　一部改めたところがある）

（注１）蜜月……親密な関係にあることのたとえ。
（注２）リリアン……手芸の材料とする人工の絹糸を丸く編んだ組糸。「リリヤン」ともいう。
（注３）些事……取るに足らないつまらないこと。
（注４）狭小……せまく小さいこと。
（注５）パトリシア・ハイスミス……一九二一～一九九五。アメリカの作家、代表作に『見知らぬ乗客』『太陽がいっぱい』がある。
（注６）林芙美子……一九〇三～一九五一。下関市生まれの作家。代表作に『放浪記』『浮雲』がある。

（一）波線部a～eのカタカナを漢字に直しなさい。
a　ヒツゼン　b　ゲンシ　c　ジツザイ　d　ハメ　e　セツボウ

（二）（　A　）には「カラー」の反対語にあたるカタカナ四字の外来語が入る。その言葉を答えなさい。

（三）破線部B「せわしなかった」・破線部C「したり顔」の本文中での意味として最も適切なものを次のア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。
B「せわしなかった」　ア　いそがしかった　イ　たのしかった　ウ　めんどくさかった　エ　かがやいていた
C「したり顔」　ア　おもしろがっている顔　イ　無表情な顔　ウ　人をバカにした顔　エ　得意そうな顔

（四）二重傍線部x『こころ』・y『羅生門』・z『城の崎にて』の作者を、次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。
ア　森鷗外　イ　芥川龍之介　ウ　志賀直哉　エ　宮澤賢治　オ　太宰治　カ　夏目漱石

（五）傍線部①「田舎によくある、本を売っていない本屋」とあるが、この本屋に「売っている本」を説明したものとして最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア　読み手を本の世界にひきずりこんでくれてわくわくさせてくれるような本。
イ　大きい本屋にはおいていないような、限られた人のためだけに書かれた本。
ウ　手芸の材料や文房具がおまけについている、何かの時にすぐに役に立つ本。
エ　ひまつぶしにはなるが、作品の世界に入りこむ楽しさを与えてくれない本。

（六）傍線部②「小学校二年生のとき、はじめてつまらないと思う本に出合った」とあるが、その本はなぜつまらなかったのか、その理由を説明したものとして最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　大判のカラーの本だったが、中に書かれていることが少しも理解できなかったから。
イ　最後まで読もうと思ったけれど、どうしても書かれていることがうそっぽく感じられたから。
ウ　入院中で頭が働かず、普段ならわかるようなことなのにさっぱりわからなかったから。
エ　本をくれたおばが、感想を伝える前に亡くなってしまったということを思い出してしまうから。

（七）傍線部③「私はそれを一気に読み、すごい、と思った」とあるが、その本はなぜすごかったのか、その理由を説明したものとして最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　絵が入っているので子供向けの本かと思っていたら、難しいことがたくさん書いてあったから。
イ　自分の知らないことがたくさん書かれていて、世界の広さを感じることができたから。
ウ　ちがう世界に連れていってくれるだけでなく、いろいろなことを考えさせてくれたから。
エ　一冊の本が読む年齢によって印象が変わることを知って本の世界の奥深さを知ったから。

（八）傍線部④「十五年かけてわかったのだ」とあるが「十五年かけて」何がわかったのか、本文中の言葉を用いて六十字以内で答えなさい。

（九）本文に書かれていることと一致（いっち）しているものを次のア～ケの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア　保育園に通っていたころは、友だちがおらず、そのつらさからのがれるために本ばかり読んでいた。
イ　本に書かれた世界を自分だけのものにしたくて、お気に入りの絵本を人の気づかない場所に隠した。
ウ　妖怪や幽霊の出てくる物語はとてもこわかったが、こわさが気になって何度も手にとっていた。
エ　横浜駅近くの有隣堂は、遊園地よりも楽しいところで、連れていってとよく母にお願いをした。
オ　恋愛話の方が楽しくて学校では本の話をすることはあまりなかったが、本を読むのをやめたわけではなかった。
カ　周りの大学生や同業者の話題にする作品はどれもすばらしく、自分のいたらなさを痛感することが多かった。
キ　無知であることを批判されたので、人の知らない本を本屋で探しては見返す機会をうかがっていた。
ク　どのような本であっても、多かれ少なかれ本は世の中を動かすものなので、本のない世界は意味のない世界である。
ケ　どんなおもしろい本であっても世界を変えることはできないだろうが、一人の人間の見る世界を変えることはできる。

③左ページの図は、イオンモール KYOTO 公式ウェブサイトからとったものである。これを見て、後の問いに答えなさい。

問１　次のア～キの記述について、表から読み取ることができれば「○」、読み取ることができなければ「×」と答えなさい。

ア　250cc の自動二輪車を 45 分間駐車した場合、いかなる場合も駐車料金は無料である。

イ　50cc の小型二輪車を 135 分間駐車した場合、駐車料金が発生する場合がある。

ウ　電気自動車の普通充電や急速充電が無料でできる。

エ　車、二輪車を合わせて 1125 台までしか停めることができない。

オ　駐車のサービス券は各専門店で、自動二輪のサービス券はインフォメーションで受け取る。

カ　このイオンモールの営業時間は朝 7 時 30 分から深夜 0 時 30 分である。

キ　駐車場に関する問い合わせは駐車場が営業していない時間にも可能である。

問２　次の場合駐車料金は少なくともいくらになるか、（漢数字ではなく）算用数字で答えなさい。ただし金額は全て税込みとする。

①休日車で来た 4 人家族。ショッピングモールでは父は映画を見て、母は合計 10,000 円の買い物をして、姉は合計 8,000 円の買い物をして、弟は合計 3,000 円の買い物をした。これに加えショッピングモール内で合計 12,000 円の食事をし、結果的にショッピングモールの駐車場には 13:00 から 20:10 まで駐車した。母はアプリクーポンを持っている。

②平日車で来た 6 人家族。ショッピングモールでは祖父は合計 12,000 円の買い物をして、祖母は合計 15,000 円の買い物をして、父は 16,000 円の買い物をして、母は 14,000 円の買い物をして、姉と弟は映画を見た。食事は隣接するターミナル駅で行い、駅の名店街でもショッピングを楽しみ、京都市内観光もバスや電車を使って楽しんだ。結果的にショッピングモールの駐車場には 10:00 から 22:00 まで駐車した。父と母はアプリクーポンを持っている。

【許諾が得られなかったため、省略】